

# 死者と生きる

VIVRE AVEC NOS MORTS

デルフィーヌ・オルヴィール著

早川書房 2750円

評・森本 あんり (神学者  
東京女子大学長)

成人して大人になるといふことは、人間の死という現実と向き合い、死者との付き合い方を心得るといふことである。人はそれを学ぶことで、社会を定義する文化の担い手となる。

本書の著者は、フランスに三人しかいないという女性のユダヤ教指導者(ラビ)だ。イスラエルで医学を学び、パリに戻って編集者となり、さらにニューヨークでラビ養成講座に学んだ。その経歴から、死を隠蔽する現代社会の貧しさを問い直したのがこのエッセーだ。生があるのは死のおかげである。秋の落葉は春の芽吹きを助け、子宮内の細胞死(アポトーシス)が胎児の指を形成する。生と死は協力し互いに編み込まれることで、歴史が紡がれてゆくのだ。だからヘブライ語の「命」は必ず複数形で、単数形はない。著者は「宗教的に中立なラビ」で、他宗教にも無神論にも自由に息づく場があることを喜ぶ。読んでみると、あの世から「お迎えが来る」

## ユダヤ教ラビが説く「死」



◇Delphine Horvilleur=1974年、フランス生まれ。ユダヤ教のラビ。東部のリベラール。スウェーデンの宗教団体。

とか「まだ来るな」と送り返されるとか、日本人に馴染みの深い話もある。他方、「子を亡くした親」を表す言葉は、フランス語にも日本語にもないがヘブライ語にはあって、「果実を収穫したあとのブドウの枝」という意味だという。各章はまるで一つのショート小説のようで、仕掛けが炸裂した時には何度も「あっ」と声をあげそうになった。ユダヤ人の得意なジョークもいくつか紹介されている。ユダヤの伝統では、家族に病人が出ると、その人の名前を変え、死の天使がやってきた時に勘違いさせて追い払うためだとか。そんなユーモラスなことを大まじめで実行するところが面白いが、これは死が全世界で無差別に家の戸を叩くようになったパンドミック下で書かれた文章である。

最後に。幼い弟を亡くした子が、大人の慰めに混乱して「どこに行ったら弟に会えるのか」と問う。土の中か、旅先か、空のかなたか。大人になったあなたは、この問いに正面から向きあって答えねばならない。白井美子訳。